

# 『西遊記』の夢

中谷宇吉郎

青空文庫



子供の頃読んだ本の中で、一番印象に残っているのは、『西遊記』である。

もう三十年も前の話であり、特に私たちの育った北陸の片田舎には、その頃は子供のための本などというものはなかった。

子供たちは、大人の読み古した講談本などを、親に叱しかられながら、こつそり読んでいた。その頃盛さかんに出ていた小波さざなみ氏の「世界お伽とき噺ばなし」のようなものも滅多に手に入らなかった。

あの一冊十銭せんかの本は、たしか全部で百冊あったはずである。もう何回となく読みかえたそのうちの一冊の末尾には、百冊の題目がずらりと並んでいた。その題目の一つ一つが少年の心には、

あらゆる空想の種であつた。これらの百冊の題目は、見開き二頁ページにぎつしり詰つまつていた。その二頁に、私たちは、いつまでもあかず見入っていた。氣に入つたお馴染なじみの題目のいくつかは、その紙面からずっと浮き出して見えた。そしてその活字の蔭かげに、古い城だの、碧あおい湖だのの姿が揺曳ようえいしていた。

そういう頃に、私は帝国文庫の『西遊記』を見つけた。私は町の小学校へはいるために、小学一年の時から町へあずけられていた。その家は旧士族しぞくの旧い家柄ふるの家であつた。そこには帝国文庫だの、それに類した本が十冊近くもあつて、それがあこがれの的であつた。

背中に金きんの文字がはいっているあの厚い本は、中が小さい字で

一杯に埋っていて、あれならばいくら読んでもおしまいにはならないように見えた。それに立派な絵も沢山はいつていた。

ようや  
ふりがな

漸く振仮名を頼りに読めるようになった時に、最初にとついたのが『西遊記』であつた。この頃になつて、久しぶりで手にしてみると、劈頭へきとうから、南贍部洲なんせんぶしゅうとか、傲来国ごうらいとかいううなむつかしい字が一杯出て来る。こういう画かくの多い字が一杯並んで、字づらが薄黒く見えるような頁が、何か変化へんげと神秘の国の扉のように、幼い心をそそつた。

面白さは無類であつた。学校から帰ると、鞆かばんを放り出して、古雑誌だの反故ほごだののうず高くつまれた小さい机の上で『西遊記』に魂をうばわれて、夕暮の時をすごした。昼でも少し薄暗い四畳

半の片隅には、夕闇ゆうやみがすぐ訪れた。その訪れにつれて、本を片手にだんだん窓際まどぎわに移って行つた。ふと顔をあげると、疲れた眼に、すぐ前の孟宗簍もうそうやぶの緑が鮮かあざやにうつつた。

仏教の寓意譚ぐういたんであるという『西遊記』が、これほど魅魔みまてき的に感ぜられたのは、雰囲気ふんいきのせいもあった。その頃の加賀かがの旧い家には、まだ一向いつこう一揆いつき時代の仏教の匂においが幾分残つていた。

一番奥の六畳間むさどが、仏壇の間まになつていた。仏壇の間は昼でも薄暗はくあんかつた。家に不相応な大きい仏壇は旧くすすけていて、燈とうみ明ようひの灯がゆるくゆれると、いぶし金の内陣が、ゆらゆらと光つて見えた。

その家の老母は、仏壇の前にきちんと坐すわつて、朝晩お経をあげ

ていた。そして月に二、三回もお坊さんが来て、長いお経をあげた。小学生の私もその間は必ず老母の横にきちんと坐ってお経をきいていた。そういうことも日課のうちのひとつとして、家の中の人でも私もちつとも変ったこととは考えていなかった。

足の痛いのを我慢しながら、じつとお経をきいていると、だんだん睡ねむくなつて来る。時々燈明がぼうつと明るくなると、仏壇の中の仏像だの、色々な金色こんじきの仏様の掛軸かけじくだのが、浮いて見えた。そして孫悟空そんごくうのいた時代がそう遠い昔とは感ぜられなかった。

太たい宗そう皇帝の水陸大会だいせがきに、玄奘法師げんじょうほうしの錦欄きんらんの袈裟けさが燦さん然ぜんと輝ほき、菩薩ぼさつが雲に乗って天に昇ると、その雲がいつの間に

か舳斗雲きんとんにかわつて、いつか自分は水色の綿蒲団わたぶとんの下に蒸されるような息苦しさを感じた。そういう時には、金色の燭しよくだい台の一点が燈明に鋭く輝いて、その光点から金色の箭やが八方にさしているのを、唯一ゆいいつのすがりどころとじつとみつめていた。

家の中には科学はおろか、およそ近代風の物の考え方というものは少しもなかった。本当のことを信ずるという現代の人たちには、本当でないから信ずるということまでは理解出来るであろう。しかし本当とか嘘うそとかいうことと信ずることが完全に乖離かいりした考え方はちよつとむつかしい。私が小学校時代を過すごした家には、あらゆる意味で、現代風な物の考え方というものは全然なかった。そういう所では孫悟空は、自由にその金箍棒きんこぼうをふるうことが出

来たのである。

小学校では、変った先生がいて、理科の時間にカントーラ・プラ  
スの星雲説などを教えてくれた。今でいえば科学普及という類たぐい  
であろうが、その先生の話を書いていると、何だか宇宙開闢かいびやく  
以前の夢の方が余計に聯想れんそうされやすかった。何もない虚空こくうに目  
に見えない力の渦うず巻まきだけがあつて、その渦の捲まき方がだんだん  
速くなる。するとその力が凝こつて物質が徐々に生れて来るような  
幻想が、いつの間にか頭の中に出来てしまった。それで折角の力  
ントーラ・プラスもまた孫悟空の味方になってしまったのである。  
今から考えてみれば、随分無茶な話であるが、それでも無事に  
中学へはいり、高等学校へ行つてピアノなどというものの実物を見

るようになっては、さすがに『西遊記』の世界からは次第に離れて行つた。そしてその反動かどうかは分らないが、物理学などを専攻することになつてしまった。

その後は、当然のことながら、長い間『西遊記』とは縁のない生活をしていた。ところが二年ほど前に思わぬところで、ひよつくり本物の八<sup>はっかい</sup>戒に出会つたのにはちよつと驚いた。それは正<sup>まさ</sup>しく本物の八戒と言つてよいものである。

紀元二千六百年記念に出版された『西<sup>せい</sup>域<sup>いき</sup>画<sup>が</sup>聚<sup>しゅう</sup>成<sup>せい</sup>』を見ているうちのことであつた。燉<sup>とん</sup>煌<sup>こう</sup>出土<sup>しゅつど</sup>の降<sup>ごう</sup>魔<sup>ま</sup>図<sup>ず</sup>の中に八戒がいたのである。中央の岩上に結<sup>け</sup>跏<sup>つか</sup>趺<sup>ふざ</sup>坐<sup>ざ</sup>した釈<sup>しゃく</sup>尊<sup>くそん</sup>の周囲に、怪奇な魔衆が群り集つてゐる、空想の限りをつくした絵である。その中に

魔衆の一人として、長い嘴くちばしを突き出した八戒が、熊手くまでをふりあげて、強くないくせに威張った顔をして立っていた。八戒のくせに裾すそ長の着物を着て、金の冠なんかをかぶって、不器用に熊手を振りかぶっている。子供の頃から頭の中にある、悪いことばかりしていて、その割に悪めにくない八戒の姿そのままがひょっくり出て来たので、大変なつかしかった。

この絵は宋初そうしよのものとされているので、本当の玄奘三蔵法師が、唐とうの太宗たいそうの貞観じやうがん三年に長安ちやうあんの都を辞して、遥はるばる印度への旅についた頃から見ると、三百年くらいも後に描かれたことになる。しかし『西遊記』の書かれたと推定されている宋末元初げんしよの頃から見ると、ずっと古いものである。古来白骨人

の収おさむる無なしとうたわれた青海せいかいのほとりには、その頃丁度八戒などもいたのであろう。審美書院しんびしゅいんの自慢の木版摺もくはんずりの色でみると、千年の間土に埋うもれていて、今また陽光を浴びた八戒は、鮮あざやかな朱しゆと黄色との着物を着て、一、二年前に描かれたような色彩のまま保存されていたのである。

八戒の出現と前後して、スタインの『中央アジア踏查記』とうさきを読むに到いたつて、私の『西遊記』の夢は益々本物になって来た。スタインの専門的な探險報告や燉煌絵画のような浩瀚こうかんなものには手が出ないが、この『踏查記』のような手輕なものに、彼の全仕事まともが纏まとめられているのは、大変有難かつた。それに風間氏かざまの重厚な訳もよかつた。

スタインは一九〇〇年から一九一六年にわたって、前後三回支那西域タクラマカンの荒野に発掘の旅をつづけた。それは古代のいわゆる絹路シルクロードを確かめ、また玄奘法師やマルコ・ポーロの通った道を、現在の地図の上に辿るのが主な目的であつた。

支那の奥地、今重慶じゅうけい政権が、ソ聯れんとの連絡に懸命の努力をつくしている西北ルートの土地は、カラコラムの氷河の氷がとけて流れ出る僅かわずの流域をのぞいては、殆んど死の世界である。玉ぎよくもんかん

門関を越えて、太平洋の水域の勢力の限界を一步出ると、その西は遙かに世界の屋根葱嶺パミールに至るまでのいわゆる支那トルキスタンの地方は、全くの荒蕪こうぶの砂漠と、乾燥し切った岩山との境である。其処そこはもはや生物の世界ではなく、暗黒な砂漠の嵐あらしが狂

い、大塩湖だいえんこの干上ひあがった塩床が、探險者の足を頑強こばに拒こばんでいる土地である。そして僅かばかりの人間が、砂漠の砂に埋れた廃墟はいきの古代都市のほとりに、僅かにヒマラヤの雪のとけ出た流れを汲くんで、辛かろうじて生命を保っているところである。

千三百年の昔に三蔵法師は、こういう土地を、本当はやはり孫悟空も八戒もつれずに、一人で歩いて行つたのであろう。「葱嶺そうれを逾こゆるに毒風肌を切り、飛砂路みちを塞ふさぐ、溪間けいかんの懸絶けんぜつするに逢あへば、縄なわを以て梁はしとなし、空に梯はしごして進む」と当時の本に残っているそうであるが、そういう旅であつた。

スタインの仕事は、この同じ恐ろしい土地で、三蔵法師の歩いた道を推定しながら、砂漠の中に埋れ去つた廃墟を発掘して、遺

跡と遺品とを探しに行くことにあつた。探險家などというと、豪放大胆な人が多いように一般には思われているが、スタインは全くそれと反対の性質の人のようであつた。スタインの探險の成功の大半は、彼の學問に負つてゐるようである。掘り出される紙片とか木簡もっかんとかに残されている文字が、スタインにはおぼろげながら、大体読めた。歐洲おうしゅう人にとっては恐るべき文字であるはずの古代の漢文、サンスクリット、古代印度のブラフミー文字など、そういうものまで、どうにか大体の意味が解せられた。そしてその文字によつて、発掘個所の意味を推定しては、次の発掘にとりかかつてゐるのである。

ニヤの古址こしでは、沢山の木簡が採集された。それは印度古代の

カロシチー文字であつた。そしてその書体から、それはスキタイ王朝即ち第一乃至第三世紀のものであることを知つた。三蔵法師よりも四、五百年も前に使われていた木簡である、千七百年の歲月を閱しても、乾き切つた砂の中に埋れていた木簡は、特に二枚重つたまま発掘されたものなどは、内面の文字の墨色が昨日のもののように鮮かであつたそうである。

この木簡を発掘した夜、スタインは早速天幕に退いて、人夫たちを先にねかし、自分は一人で、その解読にとりかかった。その夜の寒気は特に厳しくて、最低零下四十一度まで下つたということである。その天幕の一隅で、スタインはこのカロシチー文字を読み解いて、冒頭の一行が「国王殿下命令書」であることを知つ

た。それは官命を伝える一種の公文書であつた。古代印度語がこの世紀に少くも行政用としては遙々この中央アジアの僻地<sup>へきち</sup>まで侵入していたのである。翌日スタインは次の収穫を期して、廃墟の南側の数房の発掘にとりかかった。そしてその部屋の当時の使用目的を推定して、最後の住人が残したまま、積み重ねられていた多数の木簡を発見したのである。玄奘がこの附近を通つた頃は、この土地は、当時既に乾燥状態に入っていた砂漠の中に埋れていた。あらゆる生命を<sup>お</sup>押し潰<sup>つぶ</sup>す砂の力に追われて、最後の住人がこの土地を棄<sup>す</sup>ててから、数百年の歳月が既に過ぎていた。玄奘も印度からの帰途にこの道をとつて、流砂に埋れた廃墟の姿を見たのである。

氣候の長期變化ということは、氣象学の方では大きい問題である。もつとも文化地理学の方ではもつと大きい問題かもしれない。ハンチントンは『氣候と文明』で、太古の氣候の変遷を論じている中で、アメリカの氣候と西部アジアの氣候との比較をしている。そしてその両者が第三世紀に到<sup>いた</sup>つて不一致を来<sup>きた</sup>している理由の一つとして、「支那トルキスタンにおける多くの遺跡の放棄に余が著しく感銘したがために生じたのであるかもしれない」と告白している。

第三世紀というのは、即ちスタインがニヤの古址で発掘したカロシチー木簡の最後の使用者が、流砂に追われてその住居を棄てた時である。ハンチントンがもし『西遊記』の愛読者であつたな

らば、もつと感銘しすぎたかもしれない。

『西遊記』と限らず、この種のいわゆる支那の奇書くらい放恣な幻想がその翼をかって、奔放に虚空を翔けまわっているものも少いであろう。そしてその幻想が『ギリシャ神話』とか『アラビヤ夜話』とかいうものと、何処かなり深いところで、その情趣を異にしている所以は、その幻想が支那大陸の妖しいまでに広大な自然と融合しているからであろう。

スタインの本を読んでいると、到るところで『西遊記』の情景を見ることが出来る。八百里の間ごとく火焰につつまれ、それを越えようとすれば黒鉄の身体でもとけてしまうという火焰山では、孫悟空は羅刹女の芭蕉扇にあおられてひどい目にあ

つた。その火焰山は昔孫悟空が天宮を鬧さわがした時、老君の丹炉たんろを踏ふみ倒たおし、それが地に降ふつて出来たものである。それはなかなか活火山などという生なま易やすしいものではないらしい。

安西あんせいから北山ほくざん山脈をこえて、トルファン盆地へ出ると、そ

こは北に積雪のボグド・ウラ、南はクルツク・タグの侵蝕丘陵地帯に挟まれた流出口のない低地である。クルツク・タグの山麓さんろくには、海面下千呎フイートの深地がある。かつての鹹湖かんこは今は大部分涸渴こかつして、塩床の峻けわしい砂礫地されきちである。この完全に人間の世界から隔絶された不毛の荒野を行くうちに、旅人は気圧計の針がだんだん昇あつて行つて、遂に自分が、海面下千呎のところにいることを知るであらう。「北側の山麓は広漠たる乾燥した砂礫の斜面で、そ

の縁ふちにそつて、極度に不毛の丘陵くつきが崛起くつき」している。その砂岩と礫岩とより成る赤裸の山肌は、無人の境にあつて「見るからに毒々しく真赤まっかに照り映えている。」そしてそれは昔から土地の支那人の間に「火の山」と呼ばれていたのである。それこそは活火山などよりも、もつと本當な火の山なのであろう。

玄奘げんじょう法師ほうしは、その十七年の長い旅の首途かどにおいて既に、この北の沙漠に路を失い水に渴かつえ、命からがら哈密ハミのオアシスに辿たどり着いたのだそうである。

「毒風肌を切る」葱嶺パミールをこえるに當つて、玄奘は「竜王の潜ひそむ大竜池」のほとりを通っている。それは、紺碧こんぺきの「無限の深しんえ淵ん」なのである。スタインによれば、今のグレートパミール河

の水源地ヴィクトリア湖がそれであるという。スタインが其処を訪れた時は、標高一万四千呎の湖面を氷のような寒風が吹いていた。そして一片の雲もない青空は黒く澄み上り、その中に白く輝いた太陽が寂<sup>じやく</sup>としてかかっていた。人類創成の昔から今まで、人間の力というものが全く加わっていないこの秘境で、スタインはあらゆる時の距<sup>へだた</sup>りを忘れて、身近かに玄奘やマルコ・ポーロのいぶきを感じた。

無限の深淵の底は遠く四大洲の外につづき、東勝神洲の水底深くにも達している。その東海の底、竜王のすむ水晶宮へも、孫悟空は閉水の法を使って自由に潜り入ることが出来た。またタクラマカンの死の荒野の東、ロプ海<sup>かいしよう</sup>床<sup>ひあが</sup>を越え、乾上った海底に残

る竜宮城の廃墟のまぼろしを眼のあたりに見ながら、玄奘は印度からの帰途を急いだことであろう。

この道を辿るべく、三十頭の駱駝らくだにあらゆる探險用具と大氷袋とをつみ、すっかり準備をととのえたスタインの一行は、嚴冬を目ざして、ミラーンの古市を出発した。そして楼蘭ろうらんを中心とする一帯の発掘に惨憺さんたんたる辛苦しんくをなめた上に、更に楼蘭を起点とする古代支那路線をたずね、「塩の結晶の耀かがやく無涯むがいの曠野こうや」ロプ海床に足を踏み入れたのである。

古代ロプ鹹湖の涸底こていは、峻しい粘土の丘がもつれるように起伏し、一面に塩が化石のように硬く凍りついていた。そしてやがて「最後の檉タマリスク柳ざんがいの残骸よこたが塩野原に横わるのを後にすると、最も

早死<sup>はやし</sup>の世界ではない。全然生を知らぬ世界」となつて来た。

この「生を知らぬ世界」の中に、スタインは意外な古代路線の目印を見付けたのである。それは古代支那銅貨や珠子<sup>しゆし</sup>などの発見である。

或るところでは、塩<sup>えん</sup>晶<sup>しょう</sup>の輝く沙漠の中に、約三十ヤードにわたつて二百個余りの漢代の貨幣が、東北に向つて一線をなして散乱していたそうである。その昔玉門関を出て楼蘭に向つた駱駝の一つが、道々落して行つた品が、二千年の後に拾い出されるようなこともあつたのである。

この土地に特有な沈堆<sup>ちんたい</sup>性<sup>せい</sup>の丘陵<sup>メサ</sup>が甚だしい侵蝕作用のために、一見塔か寺院のような異形<sup>いぎよう</sup>の姿をして立っている。それは支那

の古書にある「太古の竜城の廃墟」の記事と一致するということである。

更に進むと、一面に塩おほに蔽おほわれた侵蝕高原地帯に入る。それも支那書では「白竜堆はくりようたい」という名で残っているものだそうである。こういう土地に育った孫悟空が、度々竜城を訪れたことも無理のないことであろう。

今日の私たちは、皆地質学の初歩の知識をもっている。そして山から魚の化石の出ることをそう不思議とは思わない。しかし海底が隆起して山の頂きになることは恐ろしいことである。関東の大震災で地表が僅わずか四寸すんばかり動くと、東京の街から三百年の江戸文化の名残りが完全にぬぐい去られ、明治の文化すら大半を失

つてしまった。

日本は天災の多い国というが、まだまだ私たちの祖国の土は温順なのであつて、アジアの大陸の奥地では、土地はもつと狂暴であつて、自然はもつと苛烈かれつな面をいつも見せているのである。地震なども、この西域の地では、関東大震災などとは桁けたちがいの強烈なものが有史以来しばしば襲つてゐる。そして現代でも世界の屋根パミールでは、全山塊さんかいが崩壊をつづけているような所もあるのである。

一九一一年二月の地震で、パミールの中部バルダン溪谷は、一夜にしてその面貌めんぼうを改めてしまった。崩れ落ちる岩屑いわくずが、忽たちまちにして溪谷を埋め、かつてはキルギスの絶好の牧場であつたと

ころを、美しい山湖に変えてしまったのである。それは三年後には長径十七哩マイルの湖になったのであるが、四年目にスタインが訪れた時にも、崩壊した岩屑の大堰堤だいえんていは、まだ新湖の水面上なお千二百呎をあましていた。そして山塊の崩壊はなおつづいていて、その山頂は山崩れのための土煙りで雲の如くに蔽おほわれていたそうである。眠っている地球が一度目を覚ますと、僅かにその毛ひとす一筋じの動きでも、それは人間のあらゆる空想を一度にはじきとばしてしまうであろう。

そういう風に考えると、地球物理学者や地質学者が、アルプスの山の成因を議論したり、太平洋が月のとび出した痕あとであるかないかを論じているのを孫悟空がきいたならば、われわれが『西遊

記』に驚くように、きつと驚くであろう。そういえば、現代の子供たちが、独逸ドイツからの放送をきいても、星雲の話をして、誰だれも余り驚かないのは、科学普及の功績であるか、罪過であるか急にはきめられない問題である。

この頃はうちの子供たちも本に夢中になって、御飯ごはんによばれても来なかつたり、夕闇ゆうやみの窓際まどぎわで電燈でんとうをつけずに読み入つていたりして、よく母親に叱しかられている。時々その本を覗のぞいてみると、今こんじゃく昔の感にたえないくらい子供向きの良い本が沢山出ているようである。しかしああいふ良い本ばかりでは少し可哀そうな気がしないでもない。

少しひねくれたような言い方になるかもしれないが、子供にも

よく分つて面白くて為<sup>ため</sup>になるような本ばかり読んで育つたならば、  
本当の意味で自然に驚嘆する鋭い喜びを知らなくなる虞<sup>おそ</sup>れがなく  
もない。

国民学校五年生の上の子供が、この頃『西遊記』に凝<sup>こ</sup>り出した  
のを見て、何だか恐ろしいような気がしている。というのは、折  
角買つてもらつた少国民向きの上品な『西遊記』にはざつと眼を  
通しただけで、夢中になっているのは、大人向きの旧<sup>ふる</sup>い『西遊記』  
である。

「そんなむつかしい本が分るかい」ときいても「分るさ、面白い  
よ」と言いながら、頬<sup>ほお</sup>を真赤<sup>まっか</sup>に上気させ、ふり向きもしないで読  
んでいる。

その横顔をみながら、私は静かに少年の日の古い煤すすけた家の姿を心に描いてみた。すると仏壇の間のほのかな燈とうみよう明のゆらぎが眼まのあたり蘇よみがえつて来た。

「その玄奘三蔵げんじようさんぞうというお坊さんは本当にいた人なんだよ。その坊さんの書いた本もお父さまは持つてるよ。印度へお経をとりに行つた途中のことが、書いてあるんだが、見せてやろうか」と言うと勿論もちろん大変なさわぎである。三人の子供が折りかさなつて、国訳『大唐西域記』を覗のぞき込んで、「三蔵法師玄奘奉詔ほうしやうやく訳」という字に眼を光らせて、息をのんでいる。

ふと山本晋道師やまもとしんどうの『天竺紀行てんじくきこう』についていた阿育石アシヨウカ柱刻文の拓本のことを思い出して、臘伐尼林ルンビニりんのところを説明しな

がら二行だけ読んでやる。「四天王の太子を捧げし窣堵波ストウパの側に遠からず、大なる石柱ありて、上には馬の像を作れり。アシヨー無

憂カ王の建つるところなり。後に悪竜が霹靂ヘキレキせしがためにその柱は中より折れて地に仆たおれたり」

「その石の柱はね、三藏法師はこの本に書いてあるようにたしかに見たんだが、その後すっかりジャングルの中に埋れてしまつて、何処どこにあるのか分らなくなつてしまつたんだ。それから千年もの間ずっと分らなかつたんだが、それがこの頃になつてやつと見付かつたんだよ」

と言つて、その拓本を開いて見せた。「これはね、その石の柱に紙をおつつけて、墨のついた綿で叩たたいて作つたんだ。だから字の

刻<sup>ほ</sup>つてあるところだけ白く残つてゐるだろう。此<sup>ここ</sup>処にあるこの白い細い筋が面白いんだよ。この白い筋がね、悪竜の雷が落ちた時に折れた痕<sup>あと</sup>なんだよ。三蔵法師もこの割れ目を見たんだね」

子供たちは固<sup>かた</sup>唾<sup>た</sup>を呑<sup>の</sup>んだまま、眼を円くして覗き込んでゐる。そのうちに末の子が息を吸いこんで「それじゃあやっぱり本当なんだね」と感にたえたという風にいう。

さすがに上の子は「本<sup>も</sup>当<sup>ら</sup>じやないんだけど、お父ちやま、そんなもの誰に貰<sup>もら</sup>ったの」と妙なことをきく。講談本の盗み読みが出来るない現代の子供たちも、この拓本には驚いたらしかった。

地球の内部が火の球であると言うと、それを問題にするのは、少数の科学者だけである。おそらく殆<sup>ほと</sup>んどすべての子供たちは、

そんなことは分り切つてゐるさと答えるであらう。その答えは二重の意味で考えてみる必要がある。第一は、分り切つてゐると思ひ込んでゐる点であり、第二は、もっと大切なことであるが、それにあまり驚かないことである。

分り切つてゐると思う方は、科学普及書の改善によつてあるいは是正出来るかもしれない。しかしそれに本当に驚くような心を育てるには、それだけではむづかしいであらう。ひよつとすると『西遊記』教育のようなものが、案外有効なのかもしれないが、ちよつと危険な方法なので、誰にでもすすめるというわけには行かない。しかし麦は一度踏まねば発育が悪いということは、一応知つておいてよいことである。

（昭和十八年一月一日）

# 青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」 岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「樹氷の世界」 甲鳥書林

1943（昭和18）年

初出：「文藝春秋」

1943（昭和18）年1月1日

※表題は底本では、「『西遊記《さいゆうき》』の夢」となっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 『西遊記』の夢

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>